

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04235

研究課題名(和文) J. デューイの教育課程論と民主主義社会論との認識論的關係

研究課題名(英文) An Epistemological Relationship between J. Dewey's Theory of Curriculum and Democracy

研究代表者

梶原 郁郎 (KAJIWARA, Ikuo)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：30390016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：「J. デューイの教育課程論と民主主義社会論との認識論的關係」の研究課題の下、報告者はデューイの教育課程における学習者の認識形成過程に焦点を当てて、両論の關係分析を行った。その成果は学会発表四件の他、次の下の三編の論文に纏めた。(1)教科内容学としての教育課程研究 - J. デューイの教育理論に基づく教育過程の内容構想 -、(2)J. デューイの地理学習の『民主主義と教育』における構造的位置、(3)普通教育論の視座からキャリア教育を問い直す - 理科教育を通じた「職業教育」の内容と方法 -。

研究成果の概要(英文)： This study analyzed an epistemological relationship between Dewey's theory of curriculum and democracy. The result of analysis summarized as following three papers. (1) The Curriculum Study as Subject Contents Study: Development of Subject Contents based on Dewey's Educational Theory, (2) Reconsidering Career Education from the Viewpoint of Theory of General Education: Vocational Education through Science Education, (3) A Structural Position of Dewey's Geography Learning in Democracy and Education. And following four conference presentation are also the result of this study. (a) A Structural Position of Dewey's Conception of Transfer in Democracy and Education, (b) A Structural Position of Dewey's Geography Learning in Democracy and Education, (c) The Continuous Process that the Ability Controlling Environment Develops in Dewey's Empiricism, (d) The professional Role of School Teachers in Dewey's Empiricism.

研究分野：教育学

キーワード：デューイ 教育課程論 民主主義社会論 認識形成

1. 研究開始当初の背景

本研究は、後述の三つの視点(X X) から J. デューイの教育課程論を分析して、デューイの教育課程論と民主主義社会論との認識論的關係を検討した。これは、遊び plays と仕事 occupations を媒介とする地理歴史および科学学習論であるデューイの教育課程論の社会的側面を研究対象としたものである。この課題は以下の先行研究の現状を踏まえて設定されていた。

S.C. ロックフェラーらによってデューイへの関心が再燃してきた 1990 年代の動向の中、デューイの教育課程論も検討し直されている。R.B. ウェストブルックや W. ファインバーグらは学習過程に着目して、仕事を中軸とした地理・歴史および科学学習であるデューイの教育課程を改めて取り上げている。しかもその課題はデューイの民主主義概念との関連で取り上げられ、デューイの経験主義教育論と民主主義社会論との関係の解明が指向されている。この動向を前に市村尚久(2000年)は「教科主義と活動主義(経験主義)とを調停する実践論理」の究明をデューイ研究の課題として指摘しているが、これは、デューイの教育課程における仕事 occupation と科学、仕事と地理・歴史との連関構造の中身が、どのような知識をどのように獲得する過程であるのかに着目して描き上げられてきていない現状を示している。

この現状はデューイの教育課程に関する先行研究(以下、デューイの教育課程研究)に次のように見出すことができる。「料理は、単純だが基礎的な化学の諸原理と諸事実への“自然な通路”となる」(Tanner, 1991)。仕事から科学への「移行は、実際の科学によって“自然に”行われ、生物学や物理学の一層抽象的な概念の研究に導かれた」(Tanner, 1997)。「オキュペーションは、学年段階にそって、初歩的で身近な経験から、次第に社会的空間的な広がりを持ち、複雑な技術を基礎とした経験へと“発展している”」、「機織り機の製作、織物作りの経験と産業革命史の学習が“結合され”、産業の歴史的社会的な理解が“生き生きと”達成されている」(佐藤, 1990) こうした叙述の下、仕事から地理・歴史および科学への教育過程は“どのように”「自然に」「生き生きと達成されている」のかは不問に付されている。

この事情は市村(2000)の上述の指摘以降の研究でも同様である(梶原 2013)。小柳(1999)も取り上げている裁縫と綿産業の学習とを取り上げて、森(2002)は、綿産業の学習は「綿の手工業の過程における全段階を示しながら吟味される」と叙述しているが、児童は「全段階」を「吟味」しえたのかという学習過程も、同過程を教師はどのような内容と方法で援助したのかという教授過程についても触れられていない。この点は資料上の制約もあるだろうが、だからといってその叙述をもってその教育過程を明らかにした

ことにはならない。また仕事から歴史への移行過程に関して、「子どもたちが成長するについて、歴史は徐々に“分化していき”、独立した専門領域として学習されていくこと“になる”」という叙述の下、“どのように”「分化して」いくのかは問われていない。このように教育過程の内実が不問に付されている現状にデューイの教育課程研究はある。

この現状の中心的要因はデューイ研究者側にあるが、その要因がデューイ自身にもあることを、柴田義松(1993)は次のように指摘している。「衣食住の生活必需品の制作にかかわる活動」である仕事は、「産業社会においてますます高度に発展していく科学や技術の学習への導入、ないし出発点にすぎない。デューイも物づくりの活動から諸教科の知的探求への移行を考えてはいたが、[---] “学問=教科学習への移行ないし飛躍”のくわしい検討は“行っていない”」。事実、『学校と社会』(1915)も『デューイ実験学校』(Meyhew, Edwards, 1936)も、歴史学習の報告とは対照的に、純粋科学の学習に関しては金属精錬の報告でも(Dewey 1915, Meyhew, Edwards 1936)、ピンホールカメラ作りの報告でも(Meyhew, Edwards 1936)、それらの“仕事の後に”酸化還元学習・光の学習が“どのように”進められたのか、その教育過程を報告していない。

以上の状況を前にするとき、デューイの教育課程研究の“方法自体”を問うことが求められてくる。仕事から地理・歴史および科学への教育過程の中身が、デューイ実験学校に関する新たな資料によっても検討できない場合、次の(a)の方法(課題設定)を(b)に変更することが必要となる。(a)デューイ実験学校の学習者は仕事から教科(地理・歴史、科学)へどのように“移行した”のか。そして移行後、教科学習はどのように“展開された”のか。(b)デューイ実験学校の仕事は教科(地理・歴史、科学)にどのように“移行しうる”のか。そして移行後、教科学習はどのように“展開しうる”のか。

この(a)にこだわる場合、デューイ実験学校に関する新たな資料をさらに求めなければならないが、その資料があるという保障も、(a)の教育過程を教えてくれる情報をその資料が含んでいるという保障もない。この点は以上の先行研究が示すところである。これに対して、デューイの教育課程論のみならず概念形成論等の教育諸論にも基づいて、仕事と教科への教育過程を検討する方法を探れば、(b)の課題に取り組みうる。これは、デューイの教育課程を“考察”する研究というよりも、デューイに依拠して仕事から教科への教育過程を“構想・開発”する研究である。この方法によれば、仕事から教科への“移行の中身”の検討に今すぐ取り組むことができ、デューイの教育課程研究を教育過程研究として進めていくことが可能となる。

以上のデューイ研究の現状を踏まえて、本

研究の課題は設定されていた。デューイの教育課程研究が認識形成研究として展開されていない現状を打開するための方法を、本研究は上述の点に求めて、自らの課題に取り組んだ。認識形成過程研究としてのデューイの教育課程を研究することを避けて、デューイの教育課程論と民主主義社会論との認識論的關係は把握できないので、本研究は課題設定に際して、デューイの教育課程研究が上述の現状にあることを整理したわけである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下三つの視点からデューイの教育課程論を分析して、デューイの教育課程論と民主主義社会論との認識論的關係の把握にあった。() 恒常的に変化する産業技術に再適応しつつ同技術を改良できる科学的知性形成、() 自己を外側から見る他者の視点の形成、() 自己の生活を支えている生産関係(国内外の人々の連なり)の認識形成、これらをデューイの教育課程論はどのように保障しているのか。

3. 研究の方法

本研究は、デューイの教育課程研究を教育過程研究として進めることが前提となる。デューイ実験学校の資料では、デューイ実験学校の教育過程で迫ることはできないので、次の方法を採用することが求められる。それは、デューイの教育課程論のみならず概念形成論等の教育諸論にも基づいて、仕事と教科への教育過程を検討する方法である。この場合、デューイ実験学校において仕事から地理・歴史および科学への教育過程は、(1) どのように展開されたのかではなく、(2) どのように展開されるのかが研究対象となる。この方法によれば、仕事から教科への“移行の中身”の検討に今すぐ取り組むことができ、デューイの教育課程研究を教育過程研究として進めていくことが可能となる。したがって本研究ではこの方法が採用されている。

4. 研究成果

その観点()からの研究成果として、下記論文 と学会発表 を、観点(X)からの研究成果として、下記論文 と纏めた。その論文 は学会発表 を再検討して纏め直したものである。学会発表 については、観点()の研究成果の次にくる課題に取り組む、科学的知性形成を児童生徒に保障しうる教師の専門的役割を問うたものである。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計3件: 全て単著)

梶原郁郎「J.デューイの地理学習の『民主主義と教育』における構造的位相」(東北教育哲学教育史学会『教育思想』第44号、2017年、21-36頁(査読有))。

梶原郁郎「普通教育論の視座からキャリア教育を問い直す - 理科教育を通じた「職業教育」の内容と方法 - 」(日本教育方法学会『教育方法学研究』第42巻、2017年、1-11頁(査読有))。

梶原郁郎「教科内容学としての教育課程研究 - J.デューイの教育理論に基づく教育過程の内容構想 - 」(日本教科内容学会『日本教科内容学会誌』第2号、2016年、13-25頁(査読有))。

〔雑誌論文の概要〕

本稿は、J.デューイの地理学習の『民主主義と教育』(1916)における構造的位相を明らかにした。これは上記観点() () である「() 自己を外側から見る他者の視点の形成、() 自己の生活を支えている生産関係(国内外の人々の連なり)の認識形成、これらをデューイの教育課程論はどのように保障しているのか」からデューイの教育課程を問うた成果である。

この成果は次の手続きで得られたものである。デューイの民主主義社会論と教育課程論との内的関係を課題意識の大枠として、さらにそれは教育課程研究の在り方をどう規定するのかを踏まえて、本稿は、デューイの民主主義社会の資質形成(他の社会集団の他者と目的・関心を共有できる資質形成)における地理学習の役割を以下の方法で問う。その資質形成は、成員の生活に連結されている未知の他者圏(他者の繋がり)の認識形成を前提とするので、次の二点を検討する。(1) その認識形成において地理学習はいかなる役割を担っているのか、(2) その他者認識は、他者圏と目的・関心を共有するように成員を促す形態であるのか。デューイの民主主義社会論を考察した後、この二点を問うことで、デューイの地理学習の『民主主義と教育』における構造的位相を把握する。

本稿も の成果同様には上記観点() からデューイの教育課程を検討したもののだが、知識の未知への活用過程である転移の概念とデューイの教育課程との関係を問うた点に、論文 と性質を異にしている。その関係は本稿第三章で取り上げられて、以下の点を明らかにした。「恒常的に変化する産業技術に再適応しつつ同技術を改良できる科学的知性」は、知識を転移できる知性である。その知性形成を次の方法で保障するように、デューイの教育課程は構成されている。(1) 幼児の日常の思考の中にデューイは、社会的・人間的な諸要素としての知識は後続の経験へ最も容易に転移するという命題を見出している。(2) その命題を遊びと仕事に一貫して適用して両学習を組織することによって、デューイは仕事から科学への知的移行を組織している。この方法で科学の知識が転移可能なかたちで獲得されるように、デューイの教育課程は構成されている。応用科学の知

識であっても、産業生活との関連を欠いてその教育内容が組織されれば、社会的・人間的知識とはならないのに対して、仕事を通せば社会的・人間的知識となる。この点に、仕事の中で科学の知識を獲得することの認識形成論上の意味を見出すことができる。以上の検討が本稿では行われている。

本稿は上記観点()である「恒常的に変化する産業技術に再適応しつつ同技術を改良できる科学的知性形成」からデューイの教育課程を問うた成果である。デューイの教育課程研究を含む教育課程研究一般において、学習者はどのように知識を獲得してどのように認識形成を進めうるのかという観点からの研究が大きく立ち遅れている現状を踏まえて、本稿はJ.デューイの教育理論に基づいて仕事から科学への教育過程を構想する作業を通して、教育過程研究としての教育課程研究を教科内容学における教育課程研究の在り方として提示し、さらに教科内容学の社会的意義を明示している。

この検討を本稿は次の手続きで進めた。第一に、デューイの教育課程研究を教育過程研究として進めていくための方法を明示する。その方法の下、デューイの仕事から科学への教育過程を教科内容学として構想するために、第二にデューイの概念形成論を考察して、純粋科学の思考過程の要件を把握する。第三にその要件に基づいて、酸化還元の三つの定義の限界と有用性(働き)を生徒が思考できる教育過程の内容を構想する。これは金属精錬の仕事から科学への教育過程の事例となる。以上の作業を通して教科内容学としての教育課程研究の在り方を提示した後、第四に、純粋科学の社会的必要性を把握することによって教科内容学の社会的意義を明示する。

<主な引用文献>

- ・ J.Dewey, *Democracy and Education*, A Free Press, 1966.
- ・ J.Dewey, *The School and Society*, Southern Illinois University Press, 1976.
- ・ J.Dewey, *How We Think, The Later Works (8) 1925-1953*, Southern Illinois University Press, 1986.
- ・ J.Dewey, *Experience and Education, The Later Works (13) 1925-1953*, Southern Illinois University Press, 1988.
- ・ K.C.Mayhew, A.D.Edwards, *The Dewey School*, 1936, Reprinted by Atherton Press, 1965.
- ・ J.デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育』岩波書店、1975年。
- ・ J.デューイ著、宮原誠一訳『学校と社会』岩波書店、1957年。
- ・ L.N.Tanner, "The Meaning of Curriculum in Dewey's Laboratory School (1896-1904)", *Journal of Curriculum Studies*, 23-2, 1991.

- ・ 森昭『経験主義の教育原理』黎明書房、1978年。

【学会発表】(計4件：全て単独発表)

梶原郁郎「J.デューイの経験主義教育における教師の専門的役割 - 同役割の民主主義社会論における位置 - 」(東北教育哲学教育史学会大会第50回(2017年9月2日：東北大学))

梶原郁郎「J.デューイの経験主義における環境制御能力の連続的形成過程 - 同能力形成における遊びと仕事の機能 - 」(日本デューイ学会第60回研究大会(2016年9月17日：岐阜大学))

梶原郁郎「J.デューイの地理学習の『民主主義と教育』における構造的位置」東北教育哲学教育史学会第49回大会(2016年9月3日：東北大学)

梶原郁郎「J.デューイの転移概念の『民主主義と教育』における構造的位置」日本デューイ学会第59回大会(2015年10月3日：明星大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者：梶原 郁郎 (KAJIWARA, Ikuo) 山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：30390016

(2) 研究協力者：なし

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

〔その他の研究協力者〕()